

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 4 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24530864

研究課題名(和文) 臨床心理アセスメント・プロセスの検討 - 養成教育の視点から -

研究課題名(英文) Psychological assessment process from the viewpoint of professional training

研究代表者

森田 美弥子 (Morita, Miyako)

名古屋大学・教育発達科学研究科・教授

研究者番号：80210178

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：心理支援の専門家の養成教育において重要な課題の一つである「心理アセスメント」のプロセスについて検討した。具体的には、心理臨床実践の専門家が心理検査データのどこに着目してクライエント理解につなげていくのかを調査・分析した。約60名の臨床家の協力が得られ、うち25年以上の熟練臨床家6名、中堅臨床家17名、そして実践訓練中の大学院生17名の3群の比較検討を行った。

また、東海地区を中心に計11校の臨床心理士養成大学院におけるアセスメント教育担当教員へのインタビュー調査を実施し、ロールシャッハ法(投映法パーソナリティ検査)とウェクスラー法(知能検査)が重視されているという結果を得た。

研究成果の概要(英文)： This study investigated the process of psychological assessment which is important for education and training of professional clinical psychologist. Which point and how clinical psychologists focus on the assessment data? Using the Rorschach protocol, focusing points of 62 psychologists were analyzed. The quantity of the viewpoint and the quality varied according to the number of years of the clinical experience.

As a result of interview investigation of teachers in 11 clinical psychologist training graduate schools, the Rorschach method and the Wechsler method were made much of the assessment education.

研究分野：臨床心理学

キーワード：心理アセスメント 心理臨床家の養成 ロールシャッハ法

1. 研究開始当初の背景

心理学的支援の場における「アセスメント」とは、何らかの心の問題に直面して治療・相談機関を訪れた個人や家族とともに、問題とその背景を把握し、適切な支援方針を策定するための見立てを行うことである。心の問題に対する支援の出発点として重要であり、臨床心理士等の養成訓練においても、アセスメントに関する学習は必須とされている。

アセスメントの方法には、心理検査法、面接法、行動観察法がある。本研究では「心理検査」に焦点をあてるが、これまで多様な技法が開発されている。臨床現場によって用いられる技法は異なるが、共通したプロセスとして、①アセスメント目的の明確化（何をすることが必要か）、②それに適したアセスメント方法の選択、③対象者への説明と合意、④アセスメント実施により情報を得る（何に着目するか）、⑤結果の分析・解釈（仮説をたてる：どうまとめるか）、⑥所見レポート作成、対象者や関係者へのフィードバック（いかに伝えるか）といった流れがある。

ただし、個々の事例において一律のマニュアル的な対応では通用しない。そのため、アセスメント過程は臨床経験による熟達に頼りがちで、十分な理論化がなされてこなかったという指摘もある。

研究代表者は、臨床心理士養成大学院においてアセスメントに関する実習・演習を担当し、また病院その他の機関における臨床心理指導にも携わってきたことから、特に初学者へのアセスメント教育に役立つ知見を得たいと考え、本研究を計画するに至った。

2. 研究の目的

臨床心理アセスメントの学習プロセスについて検討するために、以下2点を検討する。

(1)臨床心理士養成大学院において、どのようなアセスメント教育が行われているか？現状を把握し、専門家の養成教育において必要とされるアセスメント技能について考察する。(研究1)

(2)心理検査にもとづくアセスメントを行う際、臨床心理士等の専門家が検査データから所見レポート作成に至るプロセスはどのようなものか？情報インプットと結果アウトプットの体験方略をとらえる。具体的には、ロールシャッハ法の実施記録を用いて、検査データのどこに注目し、どのように所見レポートを構成するかという臨床家の視点について調査し、①共通する基本プロセスを明確化する、②特に初心臨床家に生じる困難点をとらえる。(研究2)

これらにより、アセスメント・スキルを育成・向上させるために有効な養成教育に関する知見を得る。

3. 研究の方法

(1) 研究1：アセスメント教育に関する

調査

臨床心理士養成指定大学院 11 校（国立 4 校、私立 7 校）において臨床心理アセスメント教育を担当する教員を対象に、各 90 分程度の訪問インタビュー調査を行った。

質問内容：心理検査を用いたアセスメントに焦点を当て、以下のことを尋ねた。①アセスメント関連でどのような授業が開講されているか？（時期・期間、扱っている検査、授業の進め方など）、②大学院生は在学中にどれくらい心理検査を体験するか？（実習の場、指導体制など）、③課題と感じていることはあるか？（カリキュラム上の制約、今後取り入れたいこと、卒後研修など）。これらをもとに、アセスメント教育において何に重点をおいているか、何を学ぶことができるのかについて、自由に語っていただく。調査実施後は、記録資料を匿名化して項目ごとに整理し、共通点と独自の内容をまとめた。

(2)研究2：ロールシャッハ法を用いた臨床家の着目点（情報処理方略）に関する調査

2013年2月～11月に計5ヶ所で、研修会の一環として調査を実施した。参加者は、心理臨床実践の専門家および大学院生で、計62名であった。研究調査の趣旨を説明し、協力の同意が得られた場合のみ後述のワークシートを回収させていただき旨を伝えた。

参加者には1事例のプロトコル(36歳女性、精神科入院中に実施)を提示した。提示事例は、研究代表者が約25年前に実施した心理検査事例を用い、事例概要は最小限(年齢・性別程度)にとどめ、検査記録のみを示した。研究代表者が資料にもとづき検査概要の説明を行い、カードごとに「どこに着目し、何を読み取るか」、その後「この事例(人物像)をどう見立てるか」についてワークシートに記述することを求めた。研修会としては引き続き事例検討を行い、意見交換を行った。

なお、研究1、研究2ともに、名古屋大学大学院教育発達科学研究科研究倫理委員会の承認を受けて実施した。

4. 研究成果

(1)研究1：アセスメント教育の現状と課題
11名のアセスメント関連授業担当教員へのインタビュー調査より、以下の結果が得られた。

①開講形態：養成指定校の必修である「臨床心理査定演習」(半期×2)の他に、8校で「投映法特論」等が開講されていた。また、学部段階で心理検査の演習を行っている大学が5校あった。担当教員は、2名で分担7校、合同1校、1名3校であった。

②授業内容：共通して、ロールシャッハ法に多くの時間を割いており、テスト体験、実施・分析方法の学習、所見レポート作成を含めて、基礎的な技法習得のために半年～1年をかけていた。知能検査・発達検査は複数の検査が数回～半年で扱われているが、

WISC/WAIS については実施・分析方法の学習、所見レポート作成まで行っていることが多い。これら以外の検査（描画などの投射法、質問紙法、神経心理検査）は、大学により検査の種類は異なっていた。一つの検査を1回の授業で扱うことが多く、解説（講義）が主である。受講生が実施したロールシャッハ法や WISC などの事例の検討を授業の中で行っているのは7校で、うち2校は実習などでの臨床事例を対象としていた。他は、教員による事例提示あるいは文献の事例が用いられていた。6校で授業外に研究会が開かれており、修了生が参加している。

③院生（修士課程）の心理検査経験：学内外の実習において何らかの検査を実施する件数は、最低1～3例程度だが、10例以上という院生もあり、各大学内でかなり幅がある。検査の種類も院生により異なるものが体験されていた。指導体制としては、学内相談室の事例は基本的にSV指導教員が、学外実習の場合は査定担当などの教員が個別指導をしているが、主に実習先指導者に任せているところも5校あった。

④今後の課題：取り入れたいもの・拡充していきたいものとして、テスト・バッテリーによる事例理解、フィードバックのあり方、検査の理論的背景、神経心理検査、卒後教育などがあげられた。

アセスメント関連授業について今回の調査対象校において共通していたこととして、ロールシャッハ法とウェクスラー系知能検査を中心として、検査実施も含めて体験的に学ぶことが重視されている。その他の検査は概論紹介程度にとどまっていた。修士2年間における臨床事例を対象とした検査実施体験が、内容・回数ともに個人差が大きいことは問題と感じられた。実施・分析という基礎的な技法習得だけでなく、テスト・バッテリーを組んだアセスメント計画、フィードバックの仕方など実践的な内容を扱う大学は少なく、セラピーと結びついたアセスメントを学ぶことが望まれる。卒後教育のあり方も今後の課題と言えよう。

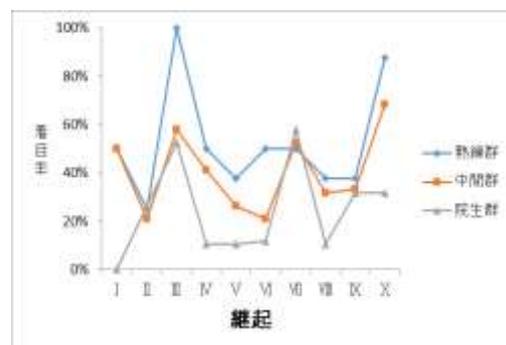
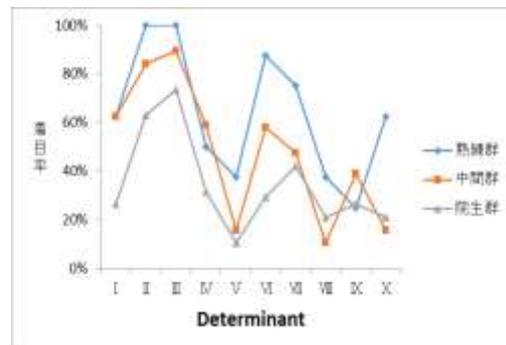
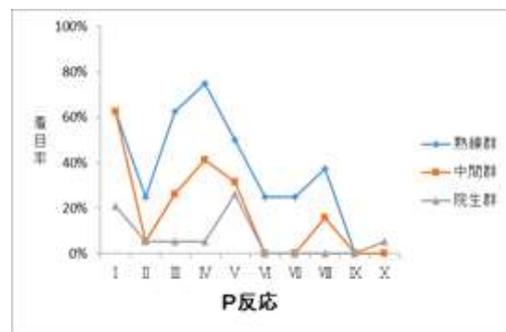
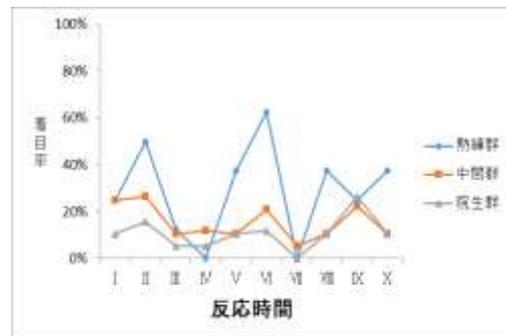
(2) 研究2：ロールシャッハ法の分析プロセスにおける臨床家の着目点

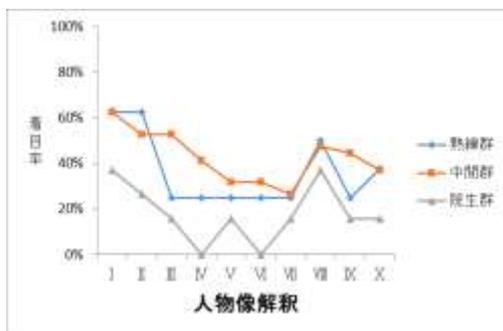
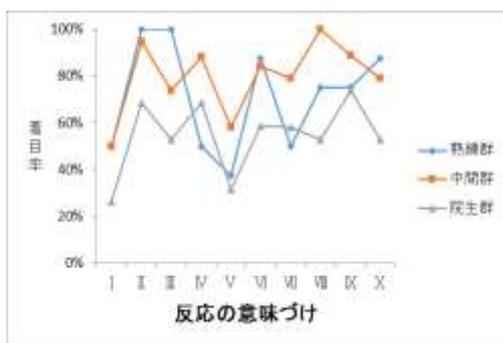
研究参加者62名のうち、院生群19名（ロールシャッハ法実施回数1～3回）、中間群19名（臨床年数2～8年、実施回数6～約100回）、熟練群8名（臨床年数25年以上、実施回数200回以上）のデータを抽出し、群間比較を行った。

記述内容については、名古屋大学式ロールシャッハ技法で用いられているスコアをもとに13項目を作成し（「初発反応時間」、「カード回転」、「反応領域（Location）」、「反応決定因（Determinant）」、「形態水準」、「反応内容（Content）」、「P反応」、「感情カテゴリー（Affective Symbolism）」、「思考・言語カテゴリー（Thinking process & Communicating

style）」、「態度」、「反応の意味づけ」、「人物像解釈」、「反応継起」）、分類整理した。

①項目別に見た特徴：「反応時間」「反応決定因（Determinant）」「P反応」「継起」「反応の意味づけ」「人物像解釈」では、およそ半数以上のカードにおいて着目率の群間差が25ポイント以上あり、群によって着目点が異なると考えられた。この6項目について、各群のカード別着目率を図示した。また、どの項目でも院生群は着目率が低い傾向にあるが、カードごとの着目率の推移は3群とも類似していた。





②カード別に見た特徴：カードIでは比較的満遍なく多様な項目に着目があり、カードIIでは「反応決定因 (Determinant)」「反応の意味づけ」などに着目が集中し、カードIIIでは「継起」などに着目される傾向があった。カードVでは全体に着目自体が少ないが、熟練群は多くの項目に着目していた。また、カードVI・VIIでは特に熟練群が「反応決定因 (Determinant)」に多く着目し、カードVIII～Xでは「反応の意味づけ」「継起」に着目する傾向があった。

カード別の特徴には本研究で用いられた事例特有の影響を受けている可能性があり、結果は慎重に考察していく必要があるものの、概ね各カード特性を反映した結果が得られたと言える。

③経験年数による着目点の比較：カードIIIでは「P 反応」「継起」、カードVIでは「反応時間」「反応決定因 (Determinant)」、カードXでは「反応決定因 (Determinant)」「継起」において、熟練群が中間群よりも着目率が高かった。熟練群は、彩色カードが続く中で立ち直れるか、シェーディングショックが起こっているか、最後のカードで立ち直る・まとめることができるか、などといったカード特徴をふまえて反応産出の流れに着目していることが示唆された。一方で、「反応の意味づけ」「人物像解釈」は、熟練群と中間群の差は小さく、カードごとの違いもあまりないことから、臨床現場に出て比較的早い段階からロールシャッハ解釈仮説への関心と活用の指向性は身に着くものと考えられる。

ただし、中間群と熟練群との記述内容には解釈の深さが異なる特徴が見られた。今後は質的な検討を加え、経験による着目点の変化について明らかにすることが課題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

- ①森田美弥子、名大式ロールシャッハ法から見てくる心の世界、静岡大学心理臨床研究第15巻、査読無、2016年、3-13
- ②土屋マチ・森田美弥子、投映法と水準仮説に関する文献展望—有効なテスト・バッテリー構築のために—、名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学)第60巻、2013年、111-119

〔学会発表〕(計4件)

- ①森田美弥子、ロールシャッハ法からの学び、日本ロールシャッハ学会第20回大会、2016年11月27日、東京国際交流館
- ②山本明日香・濱家徳子・土屋マチ・松井一裕・伊奈萌・森田美弥子、テスターはロールシャッハ・プロトコルのどこに着目しているか—図版による違いの検討—、日本ロールシャッハ学会第19回大会、2015年11月1日、立正大学
- ③濱家徳子・土屋マチ・松井一裕・山本明日香・伊奈萌・森田美弥子、テスターはロールシャッハ・プロトコルのどこに着目しているか—経験年数による比較検討—、日本ロールシャッハ学会第18回大会、2014年11月29日、佛教大学
- ④森田美弥子・永田雅子、臨床心理士養成大学院におけるアセスメント教育—教員へのインタビュー調査による現状と課題の検討—、日本心理臨床学会第32回大会、2013年8月25日、パシフィコ横浜

〔図書〕(計3件)

- ①森田美弥子・松本真理子・金井篤子監修・松本真理子・森田美弥子編、ナカニシヤ出版、心の専門家養成講座第3巻心理アセスメントの基礎、2017年、245
- ②氏原寛・森田美弥子編著、金子書房、ロールシャッハ法の豊かな多様性を臨床に生かす、2017年、216
- ③松本真理子・森田美弥子・小川俊樹編著、金子書房、児童・青年期臨床に生きるロールシャッハ法、2013年、201

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森田 美弥子 (MORITA, Miyako)

名古屋大学・大学院教育発達科学研究科・教授

研究者番号： 80210178